

看護学系授業における PBL テュートリアル教育についての考察 — スチューデントアシスタントを活用して —

高瀬加容子*

1. はじめに

平成29年3月に文部科学省から公示された次期指導要領の改訂案ではこれまでアクティブ・ラーニングと表現されていたものが「主体的・対話的で深い学び」という表現に統一された。「主体的」「対話的」「深い学び」という3つのキーワードは学士教育においても同様に取り入れることが求められている要素である。このような学びを促進する教育方法として、近年注目を集めているものにPBLテュートリアル教育がある（鈴木 2014；森 2000；池西 2007、2009、2011；岡田 2002；高瀬 2016）。

PBLテュートリアル教育の効果としては「自己学習能力」「問題解決力」「対人関係能力」の向上が報告されている。一方、課題としては学習方法の周知や時間の確保、シナリオの設定、グループ編成、テュータの確保および育成などが挙げられている（鈴木 2014：p6）。特に教育学部系の養護教諭養成における導入例としては岡田（2002）による研究が挙げられるが、その中では学習意欲・自己学習能力の点では向上が認められたが、知識をより多く得るといった視点からは講義形式の方が優れていたと報告されている。また高瀬（2016）は、同様に教育学部系の養護教諭養成におけるPBLの導入の意義について論じ、テュータの育成がPBLの効果をも高める最も重要な要素のひとつであると言及している。

本研究では、高瀬（2016）に基づき、スチューデントアシスタントとして上級生をテュータに活用したPBLテュートリアル教育の実践から得られた知見をもとに、その効果および課題について論じていく。

2. PBLの実践

2.1. 目的

本実践においては次の点についての知見を得ることを目的とした。

- 1) PBLを通して主体的な学習行動のうち、どの部分がどの程度促進されるのか。
- 2) 上級生をテュータとした場合、彼ら彼女らはそこからどのようなことを学び取るのか。
- 3) 上級生をテュータとした場合におけるPBLテュートリアル教育の課題。

2.2. 期間

2016年度秋学期開講の「看護学」全15回の授業のうち10月～11月にかけての4回でPBLの実践を行った。

2.3. 対象

2.3.1. 実践参加学生

「看護学」を履修している1年生47名、2年生10名の合計57名が本実践に参加した。参加に当たり、学生には事前にPBLテュートリアル教育の概要、本実践における学習目標、学習課題、スケジュール、評価、およびPBL学習のための6つアドバイスについてガイダンスを行った（資料1-1、2、3）。

* 東海学園大学教育学部講師

2.3.2 テュータ

養護教諭志望の 4 年生 5 名¹と担当教員の合計 6 名がテュータとして本実践に参加した。実践参加学生を 6 つのグループに分け、それぞれのグループを一人のテュータが担当した。事前の指導としてテュータに対しても PBL テュートリアル教育の概要、本実践における学習目標、学習課題、スケジュール、評価、および PBL 学習のための 6 つのアドバイスについてガイダンスを行うとともに、テュータの定義と役割、学習指導案の提示も行った（資料 2-1、2-2、3）。

2.4. 実践内容および方法²

2.4.1. 内容

本 PBL の学習課題として「シナリオの身体におこっていることについて理解する」を設定し、心疾患、喘息、糖尿病の疾患を持った小学生の 3 事例を用いて実践を行った（資料 1-2）。

2.4.2. 方法

グループ編成は 3 つの事例ごとの学生の希望を優先して行った。尚、2 年生 10 名については 1 年生と同様に希望を優先し 2 名ずつ 5 つのグループに配置した。

1 回目から 3 回目まではグループワークを実施し、最終 4 回目にて、全体でグループワークの成果発表を行った。

初回授業は各グループ内で自己紹介とグループ内のルール作成から開始した。グループ毎に作成したルールはグループ員にコピーを配布し参加を促した。「自分でわかる、みんなでわかる」をスローガンに学習を行うことを説明した。各自学習目標を設定し、グループ員に発表・共有化を行った。その後の進行は学生が行い、各自、事前に作成した資料を基に学習成果プレゼンテーションを行った。その後、グループ内で討議を進めた。学生同士で自由な発言をするようグループワークを促している。授業の最後 5 分間で各自自己の振り返りをし、自己評価表をテュータに提出した。

資料は、事前に各自シナリオの子どもの身体におこっていることをイメージしながら、学習してきた学習成果を A4 用紙 1 枚にまとめ、まとめた資料をグループ員全員にコピーし配布した。2 回目以降は学生主体でグループワークを行い、各自の学習成果発表は 2 回目も実施した。3 回目はグループの成果発表に向けての発表準備を実施した。

学習環境として指定された 1 つの教室に異なる事例の 2 つのグループを配置し、グループワークを行った。

初回の導入部分については、事前研修として、テュータに学習者役を担ってもらい、担当教員がテュータ役としてデモンストレーションを実施した。実施に当たりテュータには適宜参考となる病態生理に関する資料や参考書を提示し、事前学習を義務付けた。また過去に担当教員が PBL を実施した際の発表資料やコメントの記載を提示し、PBL 学習の一連の流れがイメージできるようにした。さらにテュータの役割として、学習環境づくりが重要であり、実践参加学生が事例をイメージできるようにサポートすることに留意するよう強調して指導を行った。テュータには毎回、実践参加学生の自己評価にポジティブフィードバックを行うとともに、次回の課題が明確になるようにコメントを入れて次回授業開始時に学生に返却することを義務付けた。毎回 PBL 授業後、グループの進捗状況や問題点について 30 分程度のテュータズミーティングを全 4 回行った。

実践参加学生に対し事後に自己評価についてアンケート調査を行った。調査内容は主体的学習行動（質問項目 1 ～ 6）、認知・問題解決能力（質問項目 7 ～ 9）、および協調性（質問項目 10 ～ 13）の 13 項目である。質問項目を「思わない（1 点）」、「あまり思わない（2 点）」、「思う（3 点）」、「とてもそう思う（4 点）」の 4 件法で回答を求めた。また、同時に自己の振り返りおよび所感を自由記述で求めた。同様に、テュータに対しても事後に自己の振り返りおよび所感を自由記述で求めた。

倫理的配慮として調査票の提出は自由であり回答の内容で不利益を被ることはなく研究結果を公表することを明記および口頭説明し、調査票の提出をもって同意を得たものとした。

3. 結果

3.1. 参加学生の自己評価

主体的学習行動に関する実践参加学生の自己評価（表1）のうち、「思う」、「とてもそう思う」と回答した割合が高かった項目は「患者に起こっていることを理解したいと思える」、「患者に何かしたいと思える」、「課題達成にむけて文献検索ができる」であり、それぞれ100.0%、97.9%、89.4%となっていた。逆に自己評価が低かった項目は「自分で学習計画が立てられる」、「学習計画に沿って学習ができる」であり、それぞれ66.0%、57.4%であった。

表1 学習者の自己評価 (n = 47)

	「思う (3)」「とてもそう思う (4)」の合計	平均点
1 患者に何かしたいと思える。	46 (97.9%)	3.5
2 患者に起こっていることを理解したいと思える。	47 (100.0%)	3.6
3 自分で学習課題を見出すことができる。	39 (83.0%)	2.9
4 自分で学習計画が立てられる。	31 (66.0%)	2.8
5 学習計画に沿って学習ができる。	27 (57.4%)	2.5
6 課題達成にむけて文献検索ができる。	42 (89.4%)	3.2
7 既知の知識を活用することができる。	40 (85.1%)	3.0
8 課題達成に向けて知識を統合することができる。	41 (87.2%)	3.0
9 患者に起こっていることが理解できる。	42 (89.4%)	3.0
10 自分の課題についてグループ員に分かりやすくプレゼンテーションできる。	39 (83.0%)	3.0
11 グループ討議で自分の考えを広めたり深めたりすることができる。	43 (91.5%)	3.1
12 グループ内で自己の役割を果たすことができる。	45 (95.7%)	3.3
13 納得のいくグループ活動成果を得ることができる。	45 (95.7%)	3.2

認知・問題解決能力に関する自己評価のうち、「思う」、「とてもそう思う」と回答した割合が最も高かった項目は「患者に起こっていることが理解できる」であり89.4%であった。他の2項目についても「思う」、「とてもそう思う」と回答した割合は87.2%、85.1%と高い割合となっていた。

協調性に関する自己評価のうち、「思う」、「とてもそう思う」と回答した割合が最も高かった項目は「グループ内で自己の役割を果たすことができる」、「納得のいくグループ活動成果を得ることができる」であり、それぞれ95.7%であった。他の2項目についても91.5%、83.0%と高い割合を占めていた。

実践参加学生の事後の所感（表2）としては「意見を主張するのが苦手だったが、何度も話し合いをすることで話し合いのペースや流れが把握できるようになり、回を重ねるごとにどんどん意見を言えるようになった」、「自分の調べたことが全てではなく、いろいろなところから資料を引っ張り出してまとめることが、より内容を深めることに役立つことがわかった」、「わかりやすくまとめようとすることで自分の頭を整理することにつながった」、「シナリオの子どもに何が起こっているか考えながら調べるのは楽しかった」、「自分達で発表の構成を考えたり、意見を言い合ったりすることができてよかった。自分達で考えて行動する力は今後社会に出たときに必要となる」、「着眼点のずれは自分だけでは見つけることができなかった」、「グループで一つの課題を進めていくことで自分の役割を強く持てた。学び方を学ぶことができ身になったと思う」などPBL活動を通しての気づきや自分が成長したことを肯定的に評価するもの、「発表がわかりやすく病気についてよくわかった」、「動画を取り入れて発表でき、値やグラフを入れた工夫ができ、評価もよくうれしかった。わかりやすく発表できたことで自分に誇りがもてた」など発表について満足感、充実感に関するもの、さらに「もっと調べればよかった」、「人に説明するのは難しく、自分が理

表2 実践参加者の所感 (抜粋)

<p><主体性></p> <ul style="list-style-type: none"> ・意見を主張するのが苦手だったが、何度も話し合いをすることで、話し合いのペースや流れが把握できるようになり、意見も上手くまとめて話せるようになった。回を重ねるごとにどんどん意見が言えるようになった。 ・PBL を行い今後の課題を見つげられるようになりよかった。 ・自分の調べたことが全てではなく、いろいろなところから資料を引っ張り出してまとめることが、より内容を深めることに役立つことがわかった。 ・わかりやすくまとめようとすることで、自分の頭の整理することにつながると思った。 ・司会をすることになり、グループの集合時間を決めたり、話を進行したりすることが多く、自分が理解しないと指示をしたり、まとめることができないとわかった。 ・自分達で発表の構成を考えたり、意見を言い合ったりすることができてよかった。自分達で考えて行動する力は、今後社会に出たときに必要となる。 ・シナリオの子どもに何が起きているか考えながら調べるのは楽しかった。 <p><問題解決></p> <ul style="list-style-type: none"> ・わからないことを皆で調べ、答えを出していくのは難しかったが、楽しかった。人数が多かったので、全員で話し合いをするのは難しいが、私たちのグループはできた。 ・症状についてはわかっていたが、詳しくは知らなかった。今後実習先で活かしていきたい。病気の対応については体の中でどのようなことが起きているか連携させていくようにしたい。 ・自分から調べることをしていきたい。 ・病気の調べ方を学べたので、これからはわからないところをどんどん調べて行きたいと思った。 ・病気の対応と体の中でどのようなことがおきているのかを連携させていくようにしたい。 ・自分だけでは着眼点はずれを知ることはできなかった。今回グループで一つの課題を進めていくことで、自分の役割を強く持てた。学び方を学ことができ、身になったと思う。 <p><協調性></p> <ul style="list-style-type: none"> ・初めは1・2年の間でぎすぎすした雰囲気があったが、2回目以降は持ち込まれることがなく協力することができた。 ・初めは学年差や人見知りの人もいて、コミュニケーションをとることが難しかったが、学習内容を共有することで、さまざまな視点から情報が集まり、内容は深いものになった。 ・自分是人見知りだが、積極的に人と話すようになり、意見を少し言え、質問されても答えられるように準備し、最後まであきらめずにできた。今後はもっと積極的に意見が言えるようにしていきたい。 ・自分の成長が実感できた。 ・今回は先輩達と一緒に活動できたことがよかった。 ・普段関わることができない2年・4年の先輩と関わってよかった。 <p><発表></p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分が発表したことの部分だけでなく、そのことに繋がることについて説明をしなければいけない。 ・他のグループの人の発表もとてもわかりやすく、3つの病気についてとてもよくわかった。 ・動画を取り入れ発表でき、値やグラフを入れて工夫でき、他のグループからの評価もよく、うれしかった。わかりやすく発表できたことで自分に誇りを持てた。 ・シナリオがざっくりでいろいろな角度から捉えることができるのもっと詳しく書いた方がわかりやすかった。 ・同じ事例でやっているのに、グループ毎にその事例の捉え方が違っており、その事例にある症状について説明方法が異なっており、勉強になった。
<p><課題・その他></p> <ul style="list-style-type: none"> ・噛み砕いた表現にするまで追いつかなかった。 ・自分は今までの経験から、ある程度はできると思っていた。しかし、自分で設定した課題が曖昧で、グループの子やテュータに指摘されて、詰まったりした。 ・プレゼンテーションの準備はなかなか手伝えず、グループの人がやってくれて協力できなかった。 ・もっと調べればよかった。 ・人に説明するのは難しく、自分が理解していないといけないので、これからはきちんと調べようと思った ・話し合いまでは一緒にできたが、パワーポイントや資料作成は学年が違うことから協力することができなかった。 ・目的を見失うことや意思疎通がうまくいかないことがよくあったので、振り返って現状把握したい。

解していないといけないので、これからはきちんと調べようと思った」、「司会をすることになり、自分が理解していないと指示したり、まとめたりすることができない」と問題点や課題についての記述も見られた。

実践参加学生の所感の中に「先輩達と一緒に活動できたことがよかった」、「普段関わることができない先輩と関わってよかった」など先輩－後輩の交流が深まるという効果も認められた。

3.2. テュータの自己評価

テュータズミーティングの中で出された意見（表3）として「このような思考が養護教諭の実践に役立つことを4年になって改めて実感した」、「テュータをしてよかった」などが出され、PBL活動に対して肯定的に捉える傾向が示された。また、テュータの事後の所感としては「答えを言わず、間接的なヒントを与えることで学生の答えを導き出すことができた」、「一歩引いた所から、皆の活動状況を観察したり、評価することを通じて人を見る目が養われた」、「集団を構成する一人ひとりのメンバーの役割やメンバー間

表3 テュータの所感（抜粋）

<p>1. テュータとして獲得したこと、成長したこと、よかったこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一歩引いたところから、皆の活動状況を観察し、評価することを通じて人を見る力が養われたと思う。特に集団を構成する一人ひとりのメンバーの役割やメンバー間の関係性を客観的に捉え、それをどう目標に向かって活かすことができるか考えるきっかけにでき、また、動かすことも少しできたためよかったと思う。 ・口出しすることも控えて学生同士で話し合わせることを意識した。今度は児童生徒らを指導するとき、本人に考えさせる姿勢を忘れないで接したい。 ・答えを言わず、間接的にヒントを与えることで学生の答えを導き出すことができた。 ・自分自身がファロー四徴症、喘息、糖尿病について勉強し直すことができよい学びの時間となった。 ・テュータは初めての経験であったが、なんとなく役割を掴むことができよい経験になりました。 ・1・2年と関わる機会が今までなかったが、関わることで初心に戻ることができた。
<p>2. 悩み、不安、困った経験など</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最初に関わったことがない学生ばかりだったので関わり方にとっても戸惑った。また、あまり発言がみられない学生にどのように関わればよいのか迷った。 ・学生とどうコミュニケーションを取るか、難しかった。数少ない回数で、信頼関係を築いてグループワークに参加することが大変だった。今回は特に対人トラブルに至るものはなかったが、もしあった場合、その学生が自分に相談してくるまでの関係を築くことができたのか、問題を鎮めることができたのかを思うととても難しかったと思う。大きな問題があった時に、テュータが担いきれるのか心配だった。 ・思わず口出ししそうになった。 ・意見を言いたかった。 ・最初は話し合いの路線がずれていって、どうなるかと思ったが、しっかりできていてよかった。
<p>3. 感想、改善点、要望など自由に</p> <ul style="list-style-type: none"> ・普段とは少し違った視点で学生と関わることでとても楽しかった。 ・テュータをしてよかった。 ・良い意見を持っている子がたくさんいて、1年生スゴイ！それを発言できる機会になって学生も全体で学よりも理解が深まったと思う。 ・1年生には難しい面も多いと思うが、早い内にこのような授業があると今後に役立つと思う。 <p><改善点・要望></p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生自身、PBLについて把握できていない部分があったため、もう少し詳細まで説明しておいてもらうと助かります。 ・グループの構成員の組み合わせは、指導者が操作することも重要なことであると感じた。受講者の意欲や興味で調べ学習ができることが一番望ましいが、必要があれば指導者がきちんとした狙いをもって班を決め、取り組ませる方法もPBLには必要なものの一つだと感じた。

の関係性を客観的に捉え、それをどう目標に向かって活かすことができるか考えるきっかけになった」などテュータ活動を通して自分自身が成長していることを示すものが多く出された。

一方、「グループメンバー間で意見がぶつかって進まないでいた」、「発言が見られない学生にどのように関わればよいのか迷った」、「グループの構成員の組み合わせは指導者が操作することも重要であると感じた」、「受講者の意欲や興味で調べ学習ができることが望ましいが、狙いを持ってグループを決めることも必要だ」などグループ学習にマイナスな影響を与えそうなコミュニケーション対立に対しての対処の仕方に困難を感じているケースも見られた。

また、「関わったことがない学生ばかりだったので関わり方に戸惑った」、「学生自身がPBLを把握できていない面もあったのでもう少し詳細まで説明しておいてほしい」などテュータ活動における事前準備の重要性をあげたものもあった。

4. 考察

学習計画の立案・実施に関する項目以外の内容は高い達成度が示されており、PBL テュートリアル教育の目標である主体的学習行動や認知・問題解決能力および協調性について学びの成果が認められた。

事例への高い関心が学習意欲の向上に繋がった一因とも考えられ、岡田（2002）の知見とも一致している。

参加者の中にはPBL活動に楽しさを感じつつも、一方で自己学習に負担を感じるものもいた。また、インターネットで検索した内容をそのまま使用する状況もみられ、PBL導入以前の段階で文献検索の方法や書籍の用い方など基本的な学習スキルの習得が前提条件であることが明らかとなった。今回テュータとして参加した学生はすべて4年生であり、教職に就くための最終的な学修段階にいる。その立場からの所感の中には、低学年の段階でのPBL学習の有効性を指摘しているものが多く、1年生の参加者よりも強くPBLの意義を感じている点は注目すべきである。

本実践で、唯一低い自己評価となったのが学習計画の立案・実施に関する項目であるが、この結果はすべての項目において高い自己評価となった池西（2009）の調査とは異なっている。本研究でのPBL実施が4回であり、池西（2009）の7回を下回っていたことがその要因の一つであると考えられる。本研究の参加学生には安易に答えを導き出し、表面的な理解で満足している傾向が認められた。テュータに促されて初めて問題点に気づくなど、参加者が自主的に計画的学習を進めるという部分に課題が残された。その部分を改善するためにはPBL実践の回数も重要な要素の一つであると考えられる。

PBLテュートリアル教育においてテュータの質がその教育成果に大きく影響するが、本実践のように、テュータに上級生を用いるような場合、その者のモチベーションをどのように高めるかが重要な課題である。今回、上級生は依頼説明時より高い興味を示しており、すでに教育実習（保健）で授業を実践していることもあり、テュータとしての役割を担うことへの高いモチベーションを保持していた。

このことが本実践の成果に大きく貢献したと言えよう。テュータの最も重要な役割は、グループダイナミクスの活用ができるような助言、課題達成に向けての集団討議・発表の場での助言、集団討議の結果の振返り、および参加者の自己評価への適切な助言である。これらに共通するのは状況を把握した上での適切な「問いかけ」である（杉浦2007）。発問力の向上は教職に就くものにとっては必須の事項であるが、本実践を通してテュータに発問力の向上が認められたことは、テュータの役割がその者自身の能力向上に繋がることを示している。

2000年に文部科学省高等教育局から出された報告書「大学における学生生活の充実方策について：学生の立場に立った大学づくりを目指して」では、学生に対する教育・指導に学生自身を活用することは、教育活動の活発化や充実に資するのみならず、教える側の学生が主体的に学ぶ姿勢や責任感を身につけるこ

とができることにもなり、非常に意義深いものであると記述されている。久田（2011）は解剖・生理学におけるPBLにおいて上級生によるチュータ制導入の結果を報告している。久田の報告によるとチュータを経験した上級生にとっても既習学習科目と現行科目の関連やグループ学習の意義の理解等、多くの学習効果が得られたという報告がなされている。しかし、逆にグループ学習に消極的な1年生への対応やグループ討議が滞った際の的確な発問に苦慮するという課題も認められている。本実践においても、グループ内で意見が言えない実践参加学生がいたり、グループワークに影響を及ぼすコミュニケーションの対立が起こったりした。PBLはグループ内の人間関係に影響を受けるために、大きな役割を果たすのがチュータの存在である。チュータは学習目標に到達できるように知識面で支援することも重要であるが、PBLでのグループワークを通して、実践参加学生がコミュニケーション能力を向上させ、協調性や人間関係を築くことができるよう手助けをすること、さらに自分の考えたことを相手にわかるように説明することの重要性を感じられるように支援していくこと等、多方面にわたるコミュニケーション上のフォローが必要である。

西村（2011）は上級生をアシスタントとして活用することの意義の一つに「先輩・後輩モデル」をスムーズに機能させることを挙げている。本実践参加者からも、先輩であるチュータに対して好意的な発言が出され、対人関係調整にチュータがよい効果を発揮していたと考えられる。学生のコンシェルジュとしての役割としての上級生は1年生の実践参加学生にとって親しみやすい存在であり、授業内容以外のことでも聞きたいことが聞ける存在として意義があり、また将来のモデルとなりうると考えられる。

5. 今後の課題

PBL テュートリアル教育実践についての課題としては学習方法の周知や時間の確保、シナリオの設定、グループ編成などが挙げられることが多いが、本実践では上級生をチュータとして活用する場合の課題に焦点を当て研究を行ってきた。チュータの質がPBL成否のカギとなることは前述したが、チュータが自ら参加することを望み、高いモチベーションを維持できるような事前教育およびチュータズミーティングでの活発な意見交換を可能にする環境づくりが重要である。そのためには、看護学PBLのチュータとなることに対し、どのような能力向上が期待できるのかを客観的に提示する手法を確立する必要がある。

佐伯は（2011）は学生のグループワークの状況、学習状況および指導状況がわかるように教員指導記録用紙を作成し活用することを提案している。本実践では使用教室が分散しており、全てのグループワークの進行状況を逐一把握することは困難であった。そこで今後は、実施状況の的確な把握のため、チュータの指導記録やチュータ用チェックシートを導入したチュータズミーティングの導入を検討したい。

また、質の高いチュータを育成するためには、システムティックなチュータ育成プログラムの開発が必要であると考えられる。

付記

本研究は東海学園大学研究倫理委員会の審査を経たものである（番号29-14）。

注

- 1 チュータは養護実習、および教育実習（保健）を終了している者から選出を行った。
- 2 池西（2007、2009、2011）の疾病理解の看護学的視点PBLのチュータズガイド、三重大学版Problem-Based Learningの手引き - （2011）を参考に実践を行った。

引用文献

- 池西静江. (2007). 看護専門学校で実践するPBLのポイント. 看護展望, 32 (13), 1284-1288.
- 池西静江. (2009). 事例演習：PBL テュートリアル教育の実践とその効果. 看護教育, 50 (4), 298-304.
- 池西静江. (2011). 疾病理解の看護学的視点PBL テュータズガイド2011. 京都中央看護保健専門学校.
- 久田雅紀子, 種田ゆかり, 成田有吾, 清水房江. (2011). 解剖生理学におけるPBLの導入－上級生によるチュータ制を実施して. 看護教育, 52 (11), 930-934.
- 木村誠子. (2009). わが国の看護基礎教育におけるProblem-Based Learning (PBL) の導入と取り組みの実際. 広島国際大学看護学ジャーナル, 7 (1), 57-65.
- 三重大学高等教育創造開発センター編. (2011). 三重大学版Problem-Based Learningの手引き－多様なPBL授業の展開－.
- 森美智子, 加藤順子, 糸井志津乃, 畑尾正彦, 中川禮子, 本間千代子, 谷岸悦子. (2000). 看護学における問題基盤型学習 (PBL) を用いたテュートリアル教育の評価. 日本赤十字武蔵野短期大学紀要, 13, 1-8.
- 西村悠, 古川康一, 西山武繁. (2011) プロジェクト. マネジメント手法による学生アシスタント制度の改善について. プロジェクトマネジメント学会2011年度秋季研究発表大会予稿集. 180-185.
- 岡田加奈子, 佐藤伸子. (2002). 教育学部養護教諭養成課程看護学系授業に導入したProblem-Based Learningの有効性の検討－知識及び自己評価の変化とPBLに対する学生の意見・感想－. 千葉大学教育学部研究紀要, 50, 137-146.
- 佐伯由香里, 大木清美. (2011). PBL教育の具体的な進め方. 看護人材教育, 8 (4), 128-134.
- 杉浦絹子. (2007). 考え, 想像する力を育てるPBL－看護学教育における展開方法とシナリオ作成法－. 看護教育, 32 (13), 1273-1279.
- 鈴木玲子編. (2014). 看護教育に役立つPBL問題解決力を育む授業の展開と工夫. メヂカルフレンド社.
- 高瀬加容子. (2016). 看護学系授業におけるPBLテュートリアル教育の取り組みの意義－教育学部系養護教諭養成課程での導入に向けて－. 東海学園大学教育研究紀要, 1, 81-87.
- 中央教育審議会答申. (2002). 大学における学生生活の充実方策について (報告)－学生の立場に立った大学づくりを目指して－.
- 中央教育審議会答申. (2017). 幼稚園教育要領, 小・中学校学習指導要領等の改訂のポイント.
- 山口乃生子, 鈴木玲子, 伊元勝美, 高橋博美, 山下美根子, 市村彰英, 常盤文枝, 大場良子, 久保田章仁. (2006). 保健医療系大学における専門科目PBLテュートリアル教育の現状. 埼玉県立大学紀要, 8, 75-82.

資料1-1 PBLの概要

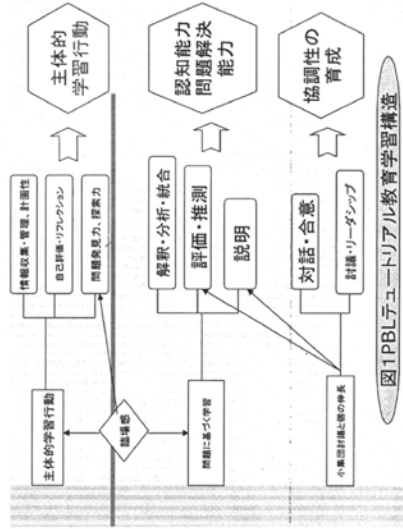
I 看護学PBLテュートリアル教育

深刻化する子どもの現代的な健康課題の解決に向けて、専門職として看護職に求められる能力の中に、認知能力、判断能力、問題解決能力、協調性、リーダーシップなどがある。もちろんこれらの能力を駆使して養護実習を行うときにはコミュニケーション能力に確かな技術が不可欠である。それらの能力を育成し、一つ一つの能力の確実な習得をめざしている。

これから行うPBLテュートリアル教育は上記の特長に認知能力、判断能力、問題解決能力、協調性とリーダーシップ能力を培うために有効な学習方法と言われている。それらの能力は養護実習で身につくものではなく、主体的学習行動が求められている。みなさんもこれからのPBLテュートリアル教育に積極的に、主体的に取り組んで、それらの能力を身につけてほしいと願っている。

PBL (Problem-Based Learning) テュートリアル教育は問題基盤型学習であり、提示された問題状況を含む事例 (Scenario) について、それぞれ小集団 (テュートリアル) で課題を見つけて、学習計画を立てて、主体的学習行動を通して、事例 (Scenario) の問題解決を図るという学習方法である。自分たちで調べ、考え、わかって自分たちの力にしていける取り組みであり、教えてもらうのではなく、自ら学ぶ学習方法である。

本校のPBLテュートリアル教育について



<出典：池西2007「看護専門学校で実践するPBLのポイント」>

(一部省略)

P機能 (Performance function: 目標・課題達成機能)
目標達成能力→成績：生産性を高める

M機能 (Maintenance function: 関係維持機能)
集団維持機能→人間関係良好・チームワーク強化できる

資料1-2 PBLの概要

1 目的・目標

1) 目的 PBLを通して主体的な学習行動ができる。

2) 学習目標

- ① Scenarioの現状状態の改善のために、自らの学習課題を明確にすることができる。
- ② グループで必要な学習計画を立てることができる。
- ③ 学習計画に沿って、各自が主体的に学習行動をとることができる。
- ④ 自己の学習成果をグループ員にプレゼンテーションすることができる。
- ⑤ 自分の学習行動を評価することができる。
- ⑥ 課題達成に向けて、グループ内で協働し、その成果をまとめて、発表することができる。

3) PBLテュートリアル教育の課題

Scenarioの現状状態改善のために、Scenarioの身体におこっていることを理解する。

4) Scenario 紹介

G	Scenario
1	<事例1>小学校1年 Aさん 女 フアロー四徴症、水分制限・塩分制限中。少し動いたら、苦しくなってしまう。軽度アノーゼあり。
2	<事例2>小学校5年 Bさん 女 喘息の既往がある。休み時間に息が苦しいという訴えで保健室に来室した。ぜんぜん喘が速く離れていても聞こえ、陰波呼吸は著明で、息苦しくて横になることができない状態であった。Aさんのピークフロー値を測定すると、自己最良値の25%を示した。
3	<事例3>小学校6年 Cさん 男 I型糖尿病 2か月前から口渇、多飲、多尿があった。体育の授業中に意識消失し、搬送され入院となる。血糖値の自己測定とインスリンの自己注射ができるようになった。4時間の体育の前に血糖値を自己測定したところ、70mg/dLであった。

<履修上の注意>

本授業はこれまでの既習の知識 (解剖学・生理学・医学概論) をもとに主体的に学ぶ授業です。解剖学・生理学・病態病変を復習して、授業に参加してください。

<参考文献>

- ・保崎清人 「臨床医学概論」ヘルシシステム研究所
- ・石橋治雄監 「これならわかる要点解剖学」南山堂ほか
- ・松村隆記 「イラストで学ぶ解剖学」医学書院
- ・病気が見える2種機器 3内分泌・代謝 4呼吸器 メディックメディア他

資料 1 - 3 PBL の概要

回	内容	提出物
1	グループワーク (テュータ紹介、全体のガイダンス) グループワークの実践① 1) 自己の学習課題およびグループの学習課題の明確化 2) 学習計画の立案	授業後 様式1 自己評価 様式2・3 PM 評価
2	グループワークの実践② 1) 各自の学習課題についてのプレゼンテーション 2) 次回の学習課題の確認、必要時学習計画の修正	様式1 自己評価
3	グループワークの実践③ 1) まとめに向けてグループ協議発表準備、発表の役割確認	様式1 自己評価
4	グループワークの成果発表 発表時間：1グループ7分 同テーマ2グループの発表後 質疑応答 10分 発表資料 A3 1枚を作成 発表方法は工夫する	様式1 自己評価 様式2・3 PM 評価 様式4 評価表

3評価について

評価項目	評価対象	評価点
個人評価	① 毎回の参加状況 (欠席は-2点)	4点
	② 課題提出状況 (個人のプレゼンテーション資料)	4点
	③ 文献の検索・活用状況	4点
	④ プレゼンテーション (伝える内容を明確にわかりやすく説明)	4点
	⑤ 既習の知識・新しく得た知識の活用	4点
グループ評価	⑥ 自己の課題に対する取り組み	4点
	① プレゼンテーション	2点
	② 資料の発行数 ③ 発表の参加度	2点

4 受講の留意点
* 個人のプレゼンテーションについて
・ A4 版 1枚にまとめてグループ人数+テュータ分を印刷し、授業開始時に配布する。
・ 欠席した場合は次回の授業までにグループ全員およびテュータに配布し、説明しておく。
5 自己評価・他者評価 (省略)
6 発表会について (省略)
7 PBL 学習のための6つのアドバイス (省略)

資料 2 - 1 テュータの定義と役割

II テュータの定義と役割

1 テュータとは

小集団学習において、課題達成に向けて、それぞれの学習計画に沿って学習ができるように助言者として参加する教員 (ハチューデントアシスタント) をいう。

2 テュータの役割

- 効果的なグループダイナミクスが活用できるように助言する。
 - なんでも話せる雰囲気づくりをする。
 - できるだけポジティブフィードバックをするように心がける。
 - 効果的なグループ協議のために、グループ内での役割を考えるように助言する。
 - 発言に偏りがないように、全員が発言できるように助言する。
 - 知的好奇心を刺激し、自ら、課題を見出せるように助言する。
 - 個々の学習課題にきちんと取り組んでいるかを確認し、必要な助言をする。
 - 必要時、グループ内の役割について考えるよう助言をする。
 - グループ内の役割が果たせているかを確認し、必要な助言をする。
 - 個々の学習態度 (遅刻、欠席、参加状況等) について、必要な助言をする。
- 課題達成に向けて集団協議・発表の場で、状況をとらえ、必要助言を行う。
 - 知識を教えるのではなく文献を紹介する、あるいは文献検索の方法を紹介するなど、学習方法や文献検索の方法について助言する。
 - 既習の知識を引き出し、問題解決・課題達成に向けた考え方を工夫できるように助言する。
 - 誤った説明についても直談判で指摘・修正するのでなく、それに気づき、考えることができるように助言する。
 - 集団協議の方向がズレたり、まとまらないときは論点を整理し、方向性を示す。
 - 協議がすすまないときや十分な協議が行われないときは、素材な疑問を引き出し、問題解決する。
 - 必要時、わかりやすいプレゼンテーションの工夫を工夫できるように助言する。
- 集団協議の結果を振り返り、自分の学習活動について適切な評価ができるように助言する。
 - 毎回、終了時5分程度の時間を設定し、自分の学習過程や協議への参加について振り返れるように助言する。
 - 毎回、終了後に提出した学習の振り返り (ポートフォリオ) にポジティブフィードバックを行うとともに、次の課題が明確になるように助言する。

3 履修上の留意点

- 学生の出席確認は必ず行い、教員へ報告する。欠席の場合はその理由を確認し、自己の学習課題は次回 PBL テュートリアルまでの間に、時間を作ってグループ員に資料配布しておくように指導する。
- 各回、終了時に学生が提出するポートフォリオに、テュータは必ず助言をして次回に学生に戻す。
- 課題達成状況に問題のある学生や、グループダイナミクス上、問題となる学生などについては必要時個別指導を行う。
- テュータ同士の連絡調整のため、原則として毎回終了後 30 分程度のミーティングを行う。
 - 最終回終了後、PBL テュートリアル教育を振り返り、担当したグループのグループダイナミクスや課題達成状況について総括的評価を行うとともに、テュータの役割について自ら評価し、課題を明確にする。

資料2-2 テュータの定義と役割

4 評価

個人課題の取り組み状況と討議への参加度を学生の自己評価を参考に、最終回終了後に評価し、科目担当者の指定の期日までに提出する。同様に全体発表評価も行い、発表会当日に評価表を科目担当者に提出する。

5 テュータズミーティングについて

PBL テュータリアル教育においてテュータの役割は大きなものである。テュータの質がその教育成果に影響すると考えられる。そこで、テュータズミーティングを行う。

場所：研究室、時間：授業終了後すみやかに

討議内容：①グループの進捗状況 ②参加状況や課題進捗状況が気になる学生指導等

(以下省略)

資料3 PBL テュータリアル教育の学習指導案

III PBL テュータリアル教育の学習指導案

対象学生：1 年次 授業回数：4 回

指導目標：1 グループで学習課題を整理し、学習計画を立てて、個別の学習課題を明確にすることができる。

2 個々が自分の課題に積極的に取り組み、グループ員にその成果をわかりやすく伝えることができる。

3 グループ内で学習成果を共有し、知識を統合し、scenario の身体におこっていることが理解できる。

4 グループでの学習成果を簡潔にまとめ、他者に伝えることができる。

5 Scenario の役割の方向性を考えることができる。

第1 回目の授業目標 1 グループで課題を整理し、学習計画を立てて、個別の学習課題を明確にすることができる。 ※初回はテュータが進め方のモデルを示すつもりで、指示するのではなく示唆・提案するように進める。

演習展開

段階	時間	学習項目	指導内容	留意点
導入	5 分	場の設定、テュータの紹介、進め方の説明	座席表(学生・テュータ)、初小ボードの配置、テュータの自己紹介と役割、PBL テュータリアル教育への期待、本時の目標説明	スローガン「自分でわかるみんなでわかる」
第一段階	10 分	自己の学習目標の設定・発表	学習目標と自己評価表から各自の学習目標を設定、グループ員に発表・共有化	
第二段階	30 分	学習課題の明確化 討議の開始 進行上の示唆 論点の整理	まずはシナリオを読もう。「わからないうところはどこか」「知りたいことではないか」「素朴な疑問を出し合おう」討議しやすくするための方法を考えるように示唆。 「話し合いを進める役割の人には必要ないか」「みんなが意見を出し合えるよう」課題に戻って、シナリオの援助のために学習すべきことを課題として確認しよう。 初小ボードを使って整理(発達段階・病名・治療・症状・訴えなど) ※シナリオの援助に役立つように病気の理解をしよう。	学生同士で自由な発言ができるように提案する。 最初からリーダーや書記を決定するような指示はしない。共通理解のためには初小ボードの活用および筆記録の必要性を示唆、論点が出される場合は、発言の認めつつ、修正、発言の正しい人への発言を促す。 ※単なる書籍を転記する学習ではなく活用できる知識にするための方向付けが必要
第三段階	10 分	学習計画の立案	「今後どのように進めていくか」 ①目標・明確か、②期間・回数・手段・方法はどうするか、③進め方は(進行・書記等) どうするか、④個人のプレゼンテーションの約束事	全員がゴールを認識し、進行方法を理解して進める。
まとめ	5 分	自己評価	本日の学習姿勢について①自己評価をする。①②を提出する。	終了後、①自己評価、②PM 自己評価をテュータに提出するように伝える。

(以下省略)

